

『崎館箋臆』について—清医の

胡兆新と幕府医官との筆談について

郭 秀 梅

京都大学附属図書館富士川文庫に『崎館箋臆』（内題は胡氏筆語卷上）写本一冊（富士川本キ九）、（以下『箋臆』と略する）が所蔵されている。この『箋臆』の成立由来については、タイトルページに「文化元年胡兆新長崎ニ来ル、幕府医官小川文庵（龍仙院法印）等往テ兆新ニ接シテ医事シ問ス此書ハ則チソノ時ノ記事ニシテ、小川文庵子ノ自ラ筆スル所、崎館箋臆ノ稿本ナリ」と記している。そして、二頁目に胡兆新が自筆で解題を、「僕木三人発江戸時秋仲也季秋而到于崎而與清客筆語數回而未有一善也萬贏之宝不如一經雖然此舉也一片南源優數卷可発一笑一笑——蘇門胡兆新題」と書いている。この解題の内容が理解できない。いたずらの文章でないかと思われる。

『箋臆』の巻末に大田覃（南畝、蜀山人）が甲子（一八〇

四）立冬後一日の日付を入れた自筆の跋文がある。跋文によると、胡兆新が毎月六回崇福寺、聖福寺で病人を診療したが、かなりの効果を得たとある。また、この『箋臆』の跋文から幕府医官の小川文庵、吉田長達、千賀道栄の三人が甲子秋に長崎に到着、客館及崇福寺、聖福寺に胡兆新を訪ねて、医学の問題について問答して、作成されたものであることが分かった。

『箋臆』は前半と後半に分かれ、前部に九月十九日から吉田長達、藍川玄慎、千賀道栄、小川文庵の質問および、胡兆新の回答の記録がある、後部には病例を記載しているが、完結していないものと感ぜられる。

『箋臆』での質問内容は基礎理論、臨床各科、針灸、本草、方剂、薬量、薬具、字義、風俗などいろいろな医学問題に及んでいる。幕府医官達が日常、難解な問題、難しい病例、あるいは興味がある医事などを、胡兆新に聞いている。これらに対する胡兆新の返答は、それぞれ実地に則して客観的に記す。胡兆新は蘇州呉県の民間医者で、古医書に詳しいというより、臨床の面に長じていた。どちらかというところ、臨床の質問に関して納得いく回答を

しているが、医学文献と考証学など問題には十分に答え
ていないし、又は、自ら分からないと正直に答えている
場合もある。

胡氏が医官達と筆語だけでなく、聖福寺、崇福寺で病
人を一緒に診ながら、脈学などの検討をしたことがある。

胡氏の脈学に関する回答に、医官達が深く感心していた。

しかし『徽瘡秘録』の陽城罐に『明史』の縊死や『十
便良方』の傷風吹雲などの質問には、どうも回答が困難
だったらしい。これらの質問は胡氏をへきえきさせたの
で、「読書というのは食物を取るように、精微を取り、糟
粕を捨てなければいけない」とたしなめ、九月二十四日
に諸医官に「読書は『靈』『素』から初めて、『傷寒論』
『金匱』の次に金元四家など次第に進み、諸家学説の中
の無意義な内容は吸収していけないという訓諭してい
る。

『箋臆』は『清医胡兆新問答録』に続き、胡兆新が来日
してから従事した医事の記録である。その内容は豊富か
つ簡明である。

『箋臆』にある質問と同じものが『清医胡兆新問答録』

にみられる、例えば、初生小兒斷臍法、妊娠腹帯、喝壓
烏質閣答、即ち早打肩、三皇廟などである。この点から
見ると、これらの問題は日本の医者達に重視されたと思
えられる。

こうした史実から、ほぼ二百年前、中日両国の学者が
対面し、筆談により交流した様子が生き生きと再現され
る。同時に、その時代の両国の医学の現状も見える。更
に、今日の私達は江戸時代の学者達が中国医学を熱意を
もって追究している姿に感銘を受けた。

本文について、順天堂大学酒井シヅ教授、茨城大学真
柳誠教授の御指導に感謝を申し上げます。

(順天堂大学医史学研究室／北里研究所東洋医学総合
研究所医史学研究所)